

# なぜ大石が大星なのか

## —『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』—

廣野行雄

### ・はじめに

『仮名手本忠臣蔵』が初めて上演されたのは、寛延元(1748)年8月の竹本座においてであった。いわゆる赤穂事件が起こったのは、殿中の刃傷が元禄十四(1701)年、吉良邸への討ち入り元禄十五(1703)年のことであり、その間半世紀近い年月があり、おびただしい数の赤穂事件に材をとった作品が人形浄瑠璃としてまた歌舞伎狂言として上演されている。いうまでもなく本作は、同種の諸作品の集大成であり、いまや赤穂事件そのものが忠臣蔵と呼ばれるようにさえなっている。

祐田善雄の『『仮名手本忠臣蔵』成立史<sup>1)</sup>』によれば、「義士劇」が『仮名手本忠臣蔵』として定着するまでには三段階の変遷があったという。

まずは、事件への好奇心に応えようとするニュース速報的、際物的なものである。もちろん事件をそのまま扱うことはできないので「別の狂言に刃傷や討ち入りをはめ込<sup>2)</sup>」むという手法がとられた。

刃傷から8年後の宝永六(1709)年当事者の一人ともいえる将軍綱吉が死去し、それに伴う事件関係者に対する恩赦の結果、内匠頭の弟大学が五百石の旗本にとりたてられ、赤穂浅野家の再興が成った。これは赤穂事件が完全な決着を見たということであり、実名は出せないものの、ほぼ史実にもとづいた脚色が許されるようになったということである。これが第二段階である。

やがて事件から数十年の月日が流れ、「史実に対する現実感が薄れて、趣向を立てるために史実を駆使する態度に変わり、前代の作品を吸収集成して、趣向の巧妙さを競<sup>3)</sup>」うようになった。その究極にあるのが『仮名手本忠臣蔵』ということになろう。

『仮名手本忠臣蔵』(以下『忠臣蔵』と略記)の上述のような性格からすれば、その趣向の独自性を考える場合、比較考量の対象となるのは当面第二段階以後の浄瑠璃、歌舞伎脚本ということになろう。本稿は、『鬼鹿毛無佐志鑑』(紀海音作、宝永七(1710)年初演)、『兼好法師物見車』(近松門左衛門作、宝永七年以前初演と推定される)、『碁盤太平記』(近松門左衛門作、宝永七年初演)、『忠臣金短冊』(並木宗助、小川丈助、安田蛙文、享保十七(1732)年)の四作品を、その仮託している時代、古典作品、いわゆる「世界」や登場人物名という側面から考察を加えていくことによって、『忠臣蔵』独自の趣向を明らかにしようとするものである。

### ・『鬼鹿毛無佐志鑑』

『鬼鹿毛無佐志鑑』は、その「世界」を説教浄瑠璃『小栗判官照手姫』においている。小栗判官説話の前段は、大納言兼家の嫡子小栗兼氏が勅勘を被って常陸に流され、相模の豪族横山氏の娘照手姫を妻とするが、それを怨んだ横山の手によって毒を盛られるという貴種流離譚と荒神、荒人神伝説からなっている。後段は、いったん地獄へ落ちた小栗が娑婆へ返され、相模藤沢遊行寺の上人によって餓鬼阿弥と名づけられ、それとは知らぬ照手の引く車に乗って熊野へ行き、三七二十一日の湯治によってもとの身体をとりもどすという仏教説話の体をとっている。永享年間に照手によって寄進されたという縁起をもつ小栗堂や小栗と照手の墓が遊行寺にあることから、説話の時代背景は自ずからこの時代ということになる。以上のような背景をふまえて『鬼鹿毛無佐志鑑』の発端は次のようである。

後花園院の御宇に時の将軍足利義政の舎弟政知

が関東に下向する。その馳走役横山左衛門は、饗応の猿樂で鼓を打った娘婿小栗兼氏を口汚く辱める。堪えかねた兼氏は、横山に斬りつけるが浅手を負わせただけで抱きとめられ討ち果たせない。日柄、場所柄をわきまえぬ不屈きな所行とされた兼氏は、近侍の与四郎に国元の家老大岸宮内へ、横山を討洩らして無念であると伝へよ、と言いつつ切腹する。

いうまでもなく現実の赤穂事件の関係者の名をそのまま用いることはできぬ相談であり、小栗判官が浅野内匠頭に、横山左衛門が吉良上野介に、大岸宮内が大石内蔵助に擬されている。大石が大岸とされているのは、その音の近さが事件の一方の主演を彷彿たらしめるからであろうし、内蔵助が宮内であるのも寮と省の違いはあっても同じ官職名を通り名としていることから同じく討ち入り一件にまつわる人々の記憶を強く喚起するからに他なるまい。

今ひとつ言っておけば、『鬼鹿毛無佐志鑑』の冒頭は次のように始まる。

子路強を問ふ。子曰く、北方の強か南方の強か。そもそも汝が強か。強たる哉強たり。<sup>4)</sup>

これは『中庸』第十章の第一節、第二節に第五節の第二句を加えたものである。最後の「強たり」は「矯たり」の誤記、誤植かと思われるが、あるいは小栗の強の強たることを言おうとする意図があつて、あえてそうしたのかも知れぬ。しかし今はそこに立ち入らない。

島田虔次によれば、『中庸』第十章は、中庸を得ることは至難であり、強者でなくては能くなさぬことを示唆しており、それを承けて「強」の種々相と真の強とについて説いているという<sup>5)</sup>。当時すでに『中庸』は、読書人にとっては必読書だったのであろうから、たとえ南北中国の「強」の違いを説いた第三節、第四節、そして君子にとっての「強」を説いた第五節第一句が略されていても、いや諷んじるほどに通曉しているものにとっては、その方が略された部分、とりわけ「故に君子は和

して流れず」を強く意識させたともいえよう。いづれにせよこの冒頭の『中庸』章句の引用は、荒ぶる英雄である小栗にかかるものであり、ひいては浅野内匠頭を諷するものであつたことは確かであつて、後世義挙とされた仇討ち一件、なかんずく首謀者大石内蔵助を称揚したのではないことは心に留めておいてよかろう。

### ・近松作品における赤穂事件

近松門左衛門の『兼好法師物見車<sup>6)</sup>』と『基盤太平記<sup>7)</sup>』は、じつは続き物であつて、前者の「加茂河原」と「音羽の瀧」が上之巻、「太秦又五郎家」と「兼好庵」が中之巻であり、下之巻にあたるのが後者なのである。兼好法師が登場することからわかるように『太平記』の「世界」に仮託しており、高師直が塩谷高貞の妻に横恋慕するという『太平記』巻二十一「塩治判官讒死事」を下敷きしているのである。

後宇多帝の八の姫宮は、足利尊氏の執事高師直に想いを掛けられ、困惑のあまり、北面の武士であつた吉田兼好に師直の思いを断ち切らせる手だてとして仮の夫婦になってほしいと頼む。兼好は、師直に頼まれ、当時美人の名が高かつた塩谷高貞の妻にあてて恋文の代筆をしたが、峻拒され、そのため高家への出入りを差し止められたが、かえってさいわいであつたという話を披露し、侍従という姫宮の侍女を介して師直の気が塩治の妻の方へうつるようにしむける。

音羽の瀧で涼みの会を催した師直は、北国へ戦に向かう夫の無事を祈るためにやって来た塩治の妻に言いよる。そこへ来合させた塩谷は、その場を座興にしようという師直の昵近薬師寺の意図を逆手にとって曾我狂言そのままに妻ともどもさんざんに師直を嘲弄する。そのため侍従は、師直の手打ちにあつて殺される。娘の無残な死に悲嘆にくれ狂乱する侍従の親たちを見た兼好は、世の無常を説き聞かせる。

師直の追討をうけた塩治の妻と家臣八幡六郎が、兼好の草庵へ逃れて来る。押しよせる師直の追っ手を討ちはらい、奥方を守りつつ、八幡六郎は落

ちのびてゆく。

ここまでが『兼好法師物見車』の梗概である。それに続く『碁盤太平記』は、内題の肩に「兼好法師あとをひ」とあることから『兼好法師物見車』の後日談であることがわかる。また、同じく内題の下に「<sup>つけた</sup>付り師直が小夜衣今は一様の黒羽織并ニ大勝四十七目の石」という角書きがあって、赤穂事件を示唆する言葉が付置されている。たとえば「一様の黒羽織」は、師直邸に討ち入った塩冶の旧臣たちのいでたちが、一様に「白小袖に黒羽織。金の札に面々の仮名実名書付て袖印に付<sup>8)</sup>」ていたと描かれていることにもとづいており、これは同士討ちを防ぐために全員が黒小袖に白い袖印を付けていたという実際の赤穂浪士たちを想起させるてだてであろう。それ以上に、露骨にといつていいほど強く赤穂事件を連想させるのは、「大勝四十七目の石」の「四十七」という数字である。時代は降るが、虎山坂井華の絶句に「山嶽可崩海可翻 不消四十七臣魂」（「泉岳寺」とあったり、東湖藤田彪の古詩「和天文祥正気歌」に「昇平二百歳 斯気常獲伸 然当其鬱屈 生四十七人」とあるように、四十七という数字は討ち入りに加わった浅野の旧臣の換喩にほかならない。

仮託する「世界」が『太平記』であること、『忠臣蔵』五、六、七段目の重要な登場人物である八の姫宮の侍女侍従、父又五郎とその女房、塩冶の扶持を離れても忠心を忘れず師直の内情を探っている岡平じつは寺岡平右衛門といった『兼好法師物見車』、『碁盤太平記』の登場人物たちは、それぞれ『忠臣蔵』のお軽とその父百姓与市兵衛、母おかや、兄平右衛門に受け継がれていく。

また、大星由良之介をはじめとして、その息子力弥、大鷲文五、小寺藤内、原郷右衛門など、あからさまに実在の大石内蔵助、息主税、大高源吾、小野寺十内、原惣右衛門を模した名前的人物が登場することは、赤穂事件がいわばすでに歴史化し、演劇化するにあたってのタブーが弱まったことを物語っているのであろう。

ところで、大石に擬せられた人物の名が、『兼好法師物見車』では八幡六郎であったのが『碁盤太

平記』では大星由良之介になっているのは、師直の遣わした追っ手の大将小林民部を討ちとり、塩冶の妻を奉じて落ちのびたのであるから、いわば世を憚るお尋ね者として変名、改名するのは当然として、なぜ変えた名が大星由良之介だったのであろうか。単に大石内蔵助と音が似ているというのであれば、『鬼鹿毛無佐志鑑』の大岸宮内、もしくは、大石は「内蔵助」という通名で世に知られていたであろうから、官職名であるということが共通する「宮内」よりは音そのものが近い「由良之介」の方がより直截に大石その人を連想させるであろうから大岸由良之介でもよかったといえそうである。事実、後述する『忠臣金短冊』においては、大岸由良之助が登場する。「大岸」も「大星」も音の近さからいえば似たようなものである。むしろ「oogishi」の方が「ooboshi」よりも各音節の母音がすべて同じ分だけ「ooishi」に近いともいえる。とすれば、大石の場合は、「大高」を「大鷲」、「惣右衛門」を「郷右衛門」といったような音の近似性だけではなく、「石」と「星」の意味的関連性、同義性にも目を配らなければならないのは誰しも気づくことである。

そもそも『碁盤太平記』という題名、題名の下に付けられた角書きの「大勝四十七目の石」は、大星の家に下男となって住み込んでいた岡平こと寺岡平右衛門が師直との内通を疑った力弥によって深手を負わされ、もはや言葉を発することすらかなわず、大星が碁盤に置く碁石の布置によって師直邸の間取り配置を教えるという筋に由来する。平右衛門の忠義に心打たれた大星は、塩冶判官に殉死した親平蔵ともども、すでに四十五人であった同志の人数に加え、こうして四十七目の石すなわち四十七士が成立するのである。さらには、平右衛門のそのような最期の様子を知らず、ふすまを隔てた隣室で碁石を置く音のみを聞いて、「お主（しゅう）の敵は打忘れ盤上乱舞の遊びごと<sup>9)</sup>」とがめだてする由良之介の妻と母の諫死へとこれまた囲碁を媒としてつながっていく。

囲碁という道具立てが、大石の石からの発想であったことはいうまでもないであろう。囲碁を打

つ人にとっては今更であるが、碁盤の盤面は縦横十九路ずつの平行線分からなり、19の2乗361の交点の上に白と黒の碁石を交互に置いて地を争うのが囲碁という盤上遊戯である。この交点を「目」というが、第四路、第十路、第十六路の交点は、漆を少し盛りあげて一見してわかるようにしてあり、この九つの交点を特に「星(井目, 星目)」という。縦横の第十路が交差する中央の星は、天元と呼ばれる。囲碁においては、「石」すなわち「星」、「星」すなわち「石」であり、『太平記』の登場人物八幡六郎が大星由良之介になった所以もここにあるであろう。

### ・『忠臣金短冊』

宝永七(1710)年までに現れた近松の二作によって、依拠する「世界」、登場人物の名前や役割の相似という点で、おおよそ『仮名手本忠臣蔵』の骨格はできあがっていたといつてよいであろう。しかし、寛延元(1748)年の『忠臣蔵』初演までには、まだ四十年近い年月が流れなければならない。その間にも『忠臣蔵』の形成史をたどる上で見落とせない作品が生まれている。『忠臣金短冊<sup>10)</sup>』がそれである。ただ、近松の二作から『忠臣金短冊』を経て『忠臣蔵』へいたる道は直線ではない。というのは本作が仮託する「世界」は、いったん『鬼鹿毛無佐志鑑』のそれへもどるからである。したがって浅野と吉良に擬せられるのは小栗判官兼氏であり、横山郡司信久である。また、刃傷におよぶまでの経緯も横山の昵近の者への依怙最眞、いやがらせと雑言という『鬼鹿毛無佐志鑑』のそれを踏襲している。

しかし、『鬼鹿毛無佐志鑑』初演から四半世紀近い時の経過が与えた変化ももちろん見られるのであって、たとえば、その冒頭は以下のようなものである。

忠功は是礼の余り、武勇は是義の余り、其余り満々として、天にはびこり高名をなす。されば松柏は雪中に其操をあらはし、忠臣は乱邦に其徳をかがやかし、よく忍びよくむくい、あら炭をのみ尸を、むちうちし代の昔をば、爰にたぐへし言種や。<sup>11)</sup>

「あら炭をのみ」とは、漆を顔に塗って面相を変え、炭を呑んで唾者のごとくになって、旧主智伯の仇趙襄氏をつけねらった豫讓の故事をふまえており、「尸を、むちうちし」とは、父と兄の仇楚の平王の墓を暴いて、その屍を三百度鞭うったという伍子胥の所行を指すのであろう。もはや赤穂事件についての知識は、あまねく行き渡っており、人々の関心は、事件がどのようにして起こったか、結果としてどうなったかを知ることにはなく、復讐の物語が、あるいはその過程にちりばめられた辛苦のエピソードがもたらすカタルシスを味わうことの方へと移っていたのである。現在のような、通してではない、五、六段目だけのあるいは七段目だけの見取り興業が可能である理由もそこにあるのであろう。小栗判官すなわち浅野内匠頭の刃傷は、物語の重要な構成要素ではあっても、最終的に浄化の涙をさそう仇討ち劇の前提にすぎぬのであるから、一編の趣旨を集約的に表現している狂言冒頭が、第II章で見たような小栗のこともってではなく、復讐譚の主役たる「忠臣」たちをもって語り出されるようになるのは当然といえれば当然のことであろう。

『忠臣金短冊』が近松作品の影響をも受けていることもまたいうまでもない。前述したように、大石内蔵助に擬される登場人物の名は、大岸由良之助となっており、苗字の方は『鬼鹿毛無佐志鑑』を、通名の方は『碁盤太平記』を踏襲した形となっている。近松で用いられた大星が大岸にもどされたことは、『碁盤太平記』の趣向が囲碁を道具立てとしており、大石から碁石へ、そして碁盤の星へと連想されたものではないかという前章における拙論の蓋然性を裏付けるものであろう。

筋立てや登場人物という点においても近松作品の影響はあきらかである。『碁盤太平記』では、師直方に入りこんで敵情を探索しつつ、由良之介親子の偽情報を伝え油断を誘うという二重スパイのような役まわりの岡平こと寺岡平右衛門が創造されたが、その意匠はそのまま小多文平こと太田武太夫にひきつがれている。『忠臣金短冊』の早野勘

平が、小栗の勘当を受けながらも旧主の仇を討とうとして果たせず、その真意をさぐるべく聾啞をよそおって由良之助に近づき、不審をいだいた力弥によって手を負わされ命を落とすという人物設定と筋立ても、まさに『碁盤太平記』の岡平をなぞったものである。

いっぽう、『仮名手本忠臣蔵』への影響も顕著であって、たとえば、義父の寺沢七右衛門の忠義のために、島原の廓に遊女九重として身を沈めるおやつは、『兼好法師物見車』の侍従の後身であり、やがて『忠臣蔵』ではお軽として重要な役まわりを担うことになる。その九重ことおやつに、実のわが娘と承知のうえで言いより、その手にかかって深手を負うが、力弥への婿引き出として横山邸の詳細な様子もらす太田武太夫は、娘小波への愛にひかされて婿力弥の手にかかって死ぬ九段目の加古川本蔵そのものである。『忠臣蔵』でお軽と対をなす早野勘平が、そのままの名前で登場することも『忠臣金短冊』と『忠臣蔵』とのつながりを示す一例として見逃すことはできない。

## ・『仮名手本忠臣蔵』と『水滸伝』

### 1. 『忠臣蔵』独自の趣向

『忠臣蔵』の「世界」は、『忠臣金短冊』で採られた『鬼鹿毛無佐志鑑』の小栗判官のそれから、ふたたび近松作品の『太平記』へともどされる。製塩で名高い赤穂を連想させる塩冶という名前、吉良の家職であった高家と師直の苗字「高」とのつながりなど、狂言作者にとって捨てるにはあまりに惜しいものであったにちがいない。

近松作品への回帰は、「世界」だけではない。いまや塩冶判官をしのぐ、主役中の主役となった大石内蔵助に擬される作中人物の名も大星由良之助に復したのである。大岸宮内が大星由良之介になり、さらに大岸由良之助へと変転したこと、またその理由と推測されることについては、すでに縷説した。では、近松の囲碁、碁盤の星という趣向をひきつがなかつたにもかかわらず、なぜふたたび大星由良之助にもどったのであろうか。そのことを考えるにあたって、まず「大序」の語り出し

の部分を検討したい。

嘉肴有りといへども食せざれば其<sup>あじはひ</sup>味をしらずとは、国治てよき武士の忠も武勇もかくるゝに、たとへば星の昼見へず夜は乱れて踊るる、例<sup>ためし</sup>を愛に仮名書の太平の代の政<sup>12)</sup>

冒頭の一句は、『礼記』「学記篇」の「雖有嘉肴弗食不知其旨、雖有至道弗学不知其善也<sup>13)</sup>」に拠っていると思われる。これは次に続く、昼は日の光によって見ることができない星々が夜になるとはっきりと見える、という喩えともども、戦士という本来の姿を示す機会を失っている一般の武士のありさまを諷すると同時に、ふだん昼行灯と陰口をきかれていたという大石内蔵助が、一朝大事の時にはみごとな変身ぶりをみせたことをほのめかしているのであろう。ここで注目したいのは、夜空の星をもちだしていること、しかも、それによって大石はじめ赤穂浪人たちがなぞらえられていることである。

『碁盤太平記』の大星は、碁盤の星であったが、『忠臣蔵』の大星は天体の星なのである。それでは、天体の星をみちびきだす、どのような趣向が用意されているのであろうか。まずは以下に大序の梗概を述べる。

暦応元年如月下旬、新田義貞を討ち滅ぼした足利尊氏は、鶴岡八幡宮に弟直義を代参として遣わす。くわえて尊氏は、敵ながらも同じ源氏の嫡流である義貞の兜を八幡宮の蔵に奉納するようにと命じた。義貞討ち死の際、亡骸のそばにおちていた兜の数は四十七、どれが義貞のものとも判らぬままに一つの唐櫃の中に入れられている。そこでその判別をいいつかるのが塩冶判官高貞の妻かおよ(かほよ)である。かおよによれば、義貞の兜は、もと後醍醐帝の召されたもので、名香蘭奢待をそえて下賜されたが、その時取り次いだのが当時十二内侍の一人であったほかならぬ自分であるという。義貞は、最期の戦のおりには、兜のうちに蘭奢待をたきしめて出ようと思うので、名香かおる首を取ったというものがあつたら自分が討ち死し

たものと思ってくれと言いのこしたという。こうして、名香の香りをたよりに、かおよは使命を果たすのである。

唐櫃から次々と兜が取り出されるくだりに「所も名にしおふ鎌倉山の星兜<sup>14)</sup>」とあるが、南北朝までの大鎧の兜は星兜といい、鉢の部分複数の鉄の板を鋳で重ね矧ぎしてつくられており、この鉢の頭を星という。とすれば、大星の星の由来をここに求めることもできそうであり、作者たちの頭に、その連想がはたらいていたであろうことは想像に難くない。しかし、それだけでは単に『碁盤太平記』の碁盤を兜に置き換えただけのことになってしまい、肝心の天体の星とのつながりの説明がつかないことになってしまう。そこに兜の星とはまったく別の何かがある介在していると考えなければなるまい。

## 2. 『水滸伝』

中国四大奇書の一つ『水滸伝<sup>15)</sup>』は、次のような発端をもっている。

大宋国の仁宗皇帝は、江西信州の竜虎山の道士張真人に京に流行する疫病退散の祈祷をさせるため將軍洪信を派遣する。竜虎山にある道観上清宮に到着した洪信は、ふとしたことから太い鎖で扉を閉ざし、その上に十数枚のお札で封印した「伏魔之殿」という社殿を見つける。先代の老祖天師が魔王を封じこめた祠だという。好奇心を抑えがたい洪信は、道士たちの止めるのも聴かず、鎖を断ちきり、お札をはがして祠の中へ踏みこむと、一基の石碑があってその裏面には「遇洪而開」の四文字が刻まれている。自分がこれを開くことが予言されていると知って気をよくした洪信は、石碑を押しつけ、台石の石亀の下を掘らせると一寸四方もある石板にいきつく。石板を取りのけると、下は底知れぬ深さの穴があいており、天地を鳴動させながら一筋の黒煙が立ちのぼったかと思うと、百に余る金の光が尾を引いて天空高く飛び散っていった。言うまでもなく、この光となって飛び散った魔王たちこそ、三十六の天罡星と七十二の地煞星、つまり後に梁山泊に集結する百八人の好漢

たちに他ならない。

『水滸伝』は、「説話」という語り物の人気演目が文字化された「話本」の集積という一面をもっており、「青面獣楊志」、「花和尚魯智深」、「行者武松」などの、本来独立した話が一つの長編の中に組み入れられたわけである。したがって複数の物語が同時進行するにつれ、次々と好漢たちのつながりが生まれるという、「出会いが出会いを呼ぶ仕掛け<sup>16)</sup>」になっている。

以上のような『水滸伝』の発端と展開の趣向が、曲亭滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』に取り入れられたことについては、高田衛『八犬伝の世界<sup>17)</sup>』に詳しい。同書によれば、宝暦七(1757)年に岡嶋冠山の『通俗忠義水滸伝』が刊行されはじめると、『湘中八雄伝』(根本武夷、明和五年)、『本朝水滸伝』(建部綾足、安永二年)、『高尾千字文』(曲亭馬琴、寛政七年)、『忠臣水滸伝』(山東京伝、寛政十一年)など多くの『水滸伝』を模した稗史小説が作られたという。高田は岡嶋冠山の『水滸伝』翻訳をもって日本における『水滸伝』ブームの幕開けとしているのであるが、それ以前に『水滸伝』が日本の文学界・演劇界に、たとえば『忠臣蔵』の作者たちに影響を与えた可能性はないのであろうか。

### ・一つの仮説として

高島俊男の労作『水滸伝と日本人<sup>18)</sup>』によれば、天海蔵『水滸志伝評林』をはじめとして17世紀なかばには各種の『水滸伝』が舶載されて日本へもたらされ、世紀の変わり目前後には、江戸の護園学派、京都の堀川学派の唐話学の盛行を経て、『三言』や『水滸伝』などの白話小説を読む気運が高まっていき、その一つの成果として、訓点付きの和刻本『忠義水滸伝』初集五冊(第一回から第十回まで)が刊行されたという。享保十三(1728)年、『忠臣蔵』の上演に先立つこと二十年のことであった。同書の内容について高島は、『水滸伝』を読みたいが白話を知らないから原文では読めない、という一般読者むけのものではなく、学術的な性格のものであり、学界にむかって自分の解釈を示した

もの<sup>19)</sup>」であるというが、文言ではもちいられない語彙、たとえば、「你」や「他」といった代名詞、「了」、「的」などの助辞のたぐいも慣れてしまえば読解にさほどの障害になったとは思えない。現に『忠臣蔵』の上演記録と劇評をまとめた『古今いろは評林<sup>20)</sup>』(天明五年刊)の漢文の序は、「的」、「甚麼」、「是个」など、近世白話の語彙や言いまわしをもって書かれており、また、馬琴はいうにおよばず、鷗外や漱石にいたるまで、その文章中に白話文の影響が見てとれる。とすれば、和刻本『忠義水滸伝』の文章が「白話を知らない人が訓点をたよりに読めばわかる、というものではない<sup>21)</sup>」という高島の判断は、江戸期読書人の読解力をあまりに低く見積もってはいないだろうか。これまでみてきた諸作品の冒頭における漢籍からの引用にその知識の一端がうかがえる、当時の知的階層の人々にとって、不十分なものであったとはいえ訓点を施された『忠義水滸伝』がまったく歯がたたないものであったとは思えない。百歩譲って、たとえ『忠臣蔵』の作者たちが、直接『忠義水滸伝』を読めなかった、読んでいなかったとしても、かれらにその発想、趣向の斬新さを伝えた人がいた、という可能性までを否定することはできないであろう。

拙論が提起する仮説の根拠は、たしかに状況証拠のみである。とはいえ、新田義貞をはじめ四十七人の兜を収めていた唐櫃が開けられるという趣向は、封閉されていた荒ぶる「もの」が解き放たれるという点において、封印が解かれ、伏魔殿の地中から天空に飛び散っていく魔王たちという『水滸伝』のそれとよりふたつである。しかも、四十七の兜によって擬えられる塩冶浪士たちは、百八の好漢同様、人の姿をとる星なのである。これをたんなる偶然の一致と見てよいものであろうか。

そればかりではない。もとは『忠臣金短冊』の主要人物であった早野勘平が連判状に加えられて四十六人、さらに『碁盤太平記』の登場人物であった岡平こと寺岡平右衛門が、由良之助から「東の供」すなわち仇討ちの仲間入りをゆるされて、い

わゆる四十七士が勢揃いするという展開の仕方は、まさに複数の物語が並行進行するにつれて同志が集結してゆくという『水滸伝』のそれではあるまいか。

さらに一言付け加えるなら、師直の邪恋が塩冶判官の死をよび、お軽との恋が勘平に切腹という最期をもたらし、小浪の力弥への思慕は父本蔵の死によって儚くもかなえられるという恋愛と死の表裏の関係性は、恋愛という愉悦の禁忌を犯すものが死によって罰せられるという『剪燈新話』や『三言』などに定型化された構造であり、ここにも『忠臣蔵』の作者たちが想像以上に近世中国小説に通じていた可能性がうかがわれ、拙論の仮説にとっての一傍証になろうかと思う。

## 注

- 1) 祐田善雄『浄瑠璃史論考』中央公論社、1975年所収。
- 2) 前掲1) 361頁。
- 3) 前掲1) 361頁。
- 4) 『鬼鹿毛無佐志鑑』日本名著全集刊行会、1927年。
- 5) 島田虔次『大学・中庸 下』朝日新聞社、1978年。
- 6) 『近松全集』第六卷、岩波書店、1987年。
- 7) 『新日本古典文学大系 近松浄瑠璃集 上』岩波書店、1993年。
- 8) 前掲7) 270頁。
- 9) 前掲7) 262頁。
- 10) 小澤愛園校訂『校訂忠臣蔵浄瑠璃集』博文館、1927~1929年。
- 11) 前掲10) 23頁。
- 12) 守随憲治校訂『仮名手本忠臣蔵』岩波文庫、1937年、18頁。
- 13) 『礼記鄭注』新興書局、1971年、124頁。
- 14) 前掲12) 19頁。
- 15) 『水滸伝』北京人民文学出版社、1975年。
- 16) 井波律子『中国の五大小説(下)』岩波新書、2009年、17頁。
- 17) 高田衛『八犬伝の世界—伝記ロマンの復権』

- 中公新書, 1980年, 72~73頁。
- 18) 高島俊男『水滸伝と日本人』, ちくま文庫, 2006年。
- 19) 前掲18) 75頁。
- 20) 前掲12) 所収。
- 21) 前掲18) 74頁。